

学位論文内容の要旨

学位申請者	水津 幸恵 【人間発達科学専攻 平成27年度生】 (平成30年9月単位修得退学)	要 旨
論文題目	幼稚園でのフィールドワークを通じた対人葛藤の保育実践的意味の研究 一倉橋惣三の保育思想とネル・ノディングズのケアリング論を視点として—	本論文は、幼児間の対人葛藤について、倉橋惣三の保育思想とネル・ノディングズのケアリング論を踏まえ、幼稚園でのフィールドワークを通して新たな保育実践的意味を探究したものである。従来、幼児間の対人葛藤については、発達心理学においてはピアジェ、コールバーグに代表される道徳的判断や他者の視点獲得等、認知発達の機会として、また、わが国の幼児教育・保育においては「道徳性の芽生え」との関係で議論されてきた。しかしながら、本研究では対人葛藤を道徳性の発達段階的にとらえる見方に疑問を呈し、保育実践的意義を検討している。
審査委員	(主査) 准教授 刑部 育子	理論的検討では、倉橋惣三の保育思想とネル・ノディングズのケアリング論から対人葛藤について検討し、その結果、倉橋惣三は、対人葛藤を道徳と結びつけておらず、自分を生存させてゆく自然のはたらきを源とする「自発性」の表れとして位置づけていたこと、道徳観念や原則を教授する道徳教育を批判し、幼児期においては他者を人間として感じ、共感的にかかわり合って生きるという「人間性の涵養」を重視していたことが明らかにされた。また、ネル・ノディングズのケアリング論においては、「個別具体的な他者」の訴えを共感的に探求してそれに応えるという日々の生活での応答的な関係に人間の道徳性を見出しており、倉橋の考え方に通ずるものであることが見いだされた。
	教授 柴坂 寿子	また、上記の理論的検討を踏まえ、保育の場でのフィールドワークの結果からは、第 1 に、対人葛藤が他者との関係の中で「自発性」のありようをめぐって起こってきたこと、第 2 に、幼児はぶつかり合いながら皆それぞれにもっている弱さや不完全さを受け入れ合って関係を築いていくこと、第 3 に、対人葛藤を抱えもちながら共に過ごしていくことは、築いてきた関係の歴史に下支えされるとともに、遊びによる自己充実によって、自身の「自発性」を確かめ、取り戻すことが、対人葛藤を経て他者と新たな関係を結び直すことに通じていることが見出された。
	教授 浜口 順子	以上のように、本研究では幼児間の対人葛藤が原則的な道徳性への認知発達論に回収されえない関係性の中での「自発性」の表れであり、「人間性の涵養」としての保育実践的意義があることが示された。
	教授 小玉 亮子	
	准教授 富士原 紀絵	